



ミュージック・イン・ザ・ダーク[®]

1 事業の趣旨

2 事業概要

- (1) 目的
- (2) 対象
- (3) 構成（プログラム）
- (4) 規模（参加者数、スタッフ数）
- (5) 所要時間
- (6) 会場
- (7) 効果

3 実施詳細

- (1) 準備プロセス
- (2) 開催プロセス
- (3) 評価プロセス

4 現場の声

- (1) 参加者の感想
- (2) スタッフからのワンポイントアドバイス！

5 過去の実施実績

1 事業の趣旨

「ミュージック・イン・ザ・ダーク」は、視覚障がいのある演奏家と視覚障がいのない演奏家との合同メンバーによるアンサンブルが、照明をすべて消した暗闇の空間で演奏し、演奏者も聴衆も視覚以外の感覚を研ぎ澄ませて音楽を体感するコンサートです。

東京藝術大学が2011年から開催してきた、芸術を通してすべての人々が分け隔てなく交流する社会包摂イベント「障がいとアーツ」プログラムの一環として2015年に始まりました。音楽の本質と視覚障がいについての深い理解が生まれ、芸術を通じてだれもが「共に生きる」社会を実現することを目指す事業です。

2 事業概要

(1) 目的

視覚障がいのある演奏家がコンサート全般の制作・運営に積極的に関わり、演奏家として更に成長する機会となること、また、視覚障がいのある聴衆が音楽により親しみ、コンサートに足を運ぶ機会の増えることを目指しています。

視覚障がいについてのさらなる理解と、視覚障がいと音楽の可能性についての新しい発見につながることを期待しています。

(2) 対象

出演者

- ・視覚障がいのあるプロの演奏家とプロの演奏家を目指す人
- ・社会包摂事業に関心や意欲のある演奏家

聴衆

- ・視覚障がいのある人（盲導犬ユーザーを含む）
- ・体験型コンサートに関心のある音楽ファン

(3) 構成

●視覚障がいのある演奏家が企画に参画

視覚障がいのある演奏家がコンサートの企画、制作、運営などに全面的に参画して、彼／彼女らの視点、感性、経験をコンサートを成功させるために活かします。

●視覚障がいのある演奏家と視覚障がいのない演奏家が暗闇の中で合同演奏

演奏会のために編成された特別アンサンブルが、コンサートの一部の曲を照明

を消した暗闇の中で演奏します。すべての演奏家が自分のパートのみならず他の奏者の部分も暗譜して、一音一音に注意深く耳を傾けて演奏する必要があり、視覚障がいのない演奏家には格別の努力が求められます。暗闇が、すべての演奏家に等しい条件のもとでの共演機会を提供するのです。

●障がいの有無にかかわらずすべての聴衆が共に鑑賞

視覚障がいのある人と視覚障がいのない人が暗闇という同じ条件で、感覚を研ぎ澄ませ、音に集中してコンサートを鑑賞します。

●視覚障がいのある聴衆のための特別プログラム

コンサートに馴染みのない聴衆も楽曲や楽器への理解・関心を高めることができるよう、開演前にワークショップ、レクチャー、デモンストレーションなど様々な形態でプログラムを実施すると効果的です。楽器の説明、曲目の背景・テーマの解説、演奏家やステージ衣装の紹介など、言葉や触感を用いて、コンサートをより楽しむことができるプログラム（以下、「ワークショップ等」）を構成します。

(4) 規模（参加者数、スタッフ数）

●参加者

聴衆の数はコンサートホール会場の規模によって決められますが、視覚障がいのある人と介助者・盲導犬のための座席数、座席エリアをあらかじめ決めておくと良いでしょう。

●コンサート出演者

視覚障がいのある演奏家を複数人含む、器楽（西洋・東洋の楽器は問いません）、声楽などによるアンサンブル。

●スタッフ

- ・制作・運営スタッフ：進行管理、ステージマネージャー、受付・会場案内・アンケート回収担当者など、会場規模と視覚障がいのある聴衆の数に応じて適宜配置します。特に視覚障がいのある人の誘導が円滑に行われるよう、余裕のある数の会場案内者が必要です。
- ・技術スタッフ：音響、照明は会場のスタッフに委ねるのが適当です。

(5) 所要時間

コンサートは休憩を含めて90～120分が適当でしょう。開演前にワークショップ等を行う場合は20～30分間程度とし、開演の30分前には終了するようにします。

(6) 会場

視覚障がいのある人のアクセスが保障され、暗闇を作ることのできるコンサートホール等の施設が適当です。盲導犬のホール入場についてあらかじめ導線などを確認しておくことが望まれます。また、開演前にワークショップ等を行う場合は、そのための会場を別途確保します。

(7) 効果

●視覚障がいに関する理解の促進

暗闇の中で聞こえてくる音楽に注意を向けることで、視覚障がいのある人にとって空間（世界）を認識するために音がいかに重要な役割を果たしているかを体感し、理解することができます。

●視覚障がいのある人のコンサートへのアクセシビリティの向上

この公演を契機に視覚障がいのある人がコンサートを訪れやすくなり、誰もが音楽を享受しやすくなる工夫を主催者も学ぶことができます。

●視覚障がいのある演奏家の活動を増やす

視覚障がいのある演奏家の演奏機会を増やすことにより、社会参加および経済的自立を支援します。

●共生社会実現への啓発

視覚障がいのある演奏家と視覚障がいのない演奏家が同じステージで共に奏でる姿をコンサートにかかわるすべての人が共有することにより、共生社会を実現することの大切さ、素晴らしさを実感し理解できます。

3 実施詳細

(1) 準備プロセス

●はじめに・・・実施日の決定と体制づくり

コンサートホールの年間スケジュールと出演候補者のスケジュールに合わせて実施日を決定します。

体制づくりは、全体の統括責任者のもとに音楽制作責任者および広報（および視覚障がいのある聴衆向けのワークショップ等）責任者を決めておきます。出演する視覚障がいのある演奏家に音楽企画制作に加わってもらいます。演奏曲目や内容については出演者と相談して決定します。

●実施6ヵ月前・・・実施概要の企画と広報内容の作成

コンサートの規模や内容に応じて共催団体、協賛団体を決めます。また予算計画や実施業務の分担を決めます。

出演者と曲目が決定したら、広報計画を立て、広報チラシの構成や告知内容、

チケット価格を決めます。視覚障がいのある人の予約・チケット販売方法と購入時に入手すべき情報などについての検討を始めます。

視覚障がいのある聴衆のための情報保障施策を決めます。以下のような施策が考えられます。

- ・コンサートの理解を深めるための特別プログラム（ワークショップ、レクチャー、デモンストレーションなど）
- ・舞台や客席の視覚情報を伝えるための音声ガイド（開演前、上演中）
- ・パンフレットの点字版・拡大文字版・音声読み上げ版
- ・舞台の視覚情報や音の響きを伝えるための説明（公演開始直前）

●実施3ヵ月前・・・広報、チケット販売開始

会場のホームページ・SNSサイトやチラシで広報を行います。視覚障がいのある人向けの広報では、次のような取り組みが効果的です。

- ・音声読み上げソフトに対応したチラシ、ウェブサイトの作成
- ・視覚障がいのある人のための情報サイトへの投稿
- ・点字・拡大文字チラシの作成
- ・音声による広報コンテンツの制作

視覚障がいのある聴衆が前方の座席で介助者・同行者と並んで鑑賞できるよう、一定数の座席を確保します。チケット販売は会場の通常ルートを通じて行いますが、視覚障がいのある人用の座席の予約・販売はホールの窓口など一か所で集約して扱うと良いでしょう。介助者・同行者との並び席をペア券として割引販売するなどの工夫も考えられます。

また、盲導犬同伴について予約時に情報を収集し、盲導犬が周囲の観客の妨げとなる心配のない座席を確保します。

開演前にワークショップ等を実施する場合には、チケット予約と同時にその申込みを受付けます。

●実施2ヵ月前・・・開演前のワークショップ等概案の決定

ワークショップ等の概案を策定し、出演者、関係者間の打ち合わせを行います。会場の下見を行って、導線、座席の配置、説明者の立ち位置等を確認します。

●実施1ヵ月前・・・チケット販売状況の確認、必要機材の発注、手配

チケット販売状況を確認し、必要に応じて販促の働きかけを視覚障がい者支援団体の協力を得て行います。期日前にワークショップ等の申込みを締め切った場合はその告知をします。

開演前または上演中に音声ガイドを行う場合や、ワークショップ等で楽器や衣装を使用する場合は、機材等の手配を行います。パンフレットの点字・拡大文字・音声読み上げ版を会場で配布する場合は、発注、手配します。

●**実施2週間前・・・ワークショップ等と音声ガイドの準備**

ワークショップ等の参加者情報を整理しスタッフで共有します。内容と進行を決定し、台本を作成します。

音声ガイドに関して、音楽制作側と運営管理側で当日の進行を打ち合わせるとともに調整を行い、台本を作成します。

●**実施1週間前・・・スタッフによる当日進行表とステージ台本の打ち合わせ**

当日の詳細な進行表、ステージ台本を策定し、関係者間で確認し合います。音楽制作側と運営管理側で進行に関する詳細な打ち合わせと調整を行います。

●**実施前日・・・音響と照明の打合せ、ワークショップ等会場のセッティング**

コンサートの音響、照明担当者と事前打ち合わせを行います。また、可能であればワークショップ等の会場セッティングを済ませておきます。音声ガイドを行う場合は、音響スタッフと共に機材および作動を確認します。

●**実施当日・・・会場設営、リハーサル**

時間的余裕をもって会場設営を行います。スタッフ間で進行を最終確認し、ステージでは演奏リハーサルを行います。

(2) **開催プロセス**

◆**コンサート**

●**受付、会場入り（開演30分前より）**

視覚障がいのある聴衆については、本人の希望を確認しつつ座席への案内、誘導、音声ガイド用機器や点字・拡大文字パンフレットの配布などを行います。また、ワークショップ等から引き続いてコンサートに参加する人については会場間の誘導を行います。

●**開演前（開演15～5分前）**

音声ガイドを実施する場合は、聴衆が座席で開演を待つ時間帯に行うのが適当です。舞台や会場のつくりなどの視覚情報を言葉で説明すれば、視覚障がいのある聴衆ばかりでなくすべての聴衆に有益です。ホール内に無線システムが備えられていない場合は、レンタルのシステムおよび機器を利用することができます。

●**開演あいさつ（5分）**

主催者代表が聴衆を歓迎し、コンサートの趣旨を説明します。さらに、舞台上からの音の響きを拍手や生の声で紹介するなど、視覚情報保障を実例で示すと良いでしょう。

●**コンサート（90～120分）**

客席も含め完全な暗闇で演奏する曲、照明のついた状態で演奏する曲、途中で暗転・明転する曲など、曲想に応じて会場の明るさに変化をつけて、コンサートを進行します。

演奏家がMCを務めて曲目や出演者の紹介を行うのも良いでしょう。

◆ワークショップ等

●受付、会場入り（開始 20 分前より）

受付で氏名を確認し、会場内の座席へ案内、誘導します。

●開会あいさつ（5分）

司会者が参加者を歓迎し、趣旨および進行を説明します。

●ワークショップ（20～30分）

演奏曲目の解説、楽器、舞台、演奏者などの説明、体験などをできる限りインタラクティブな形式で実施します。次のような内容を加えるのも良いでしょう。

- ・楽器の音色を聴く。
- ・実物の楽器に触れてその形状や質感を理解する。
- ・舞台衣装に触れて雰囲気味わう。

●閉会あいさつとコンサート会場への案内

閉会を告げ、コンサートの案内をします。点字・拡大文字パンフレット、音声ガイドなどの提供があれば紹介し、会場への導線やトイレを案内します。

(3) 評価プロセス

「ミュージック・イン・ザ・ダーク」をより良いものにしていくためには実施後の以下の振り返りが有効です。

●アンケート集計と分析

参加者の満足度を知り、主催者が気付かない実施上の問題点をみつけるために、参加者から感想、気付きの点、批評などを聞かせてもらうことが大切です。アンケートは短時間で記述、回収できるように要点を絞ったものとし、実施後すぐに会場で回収できるようにします。QRコードを印刷した紙を配布して、ウェブサイトアクセスし、回答してもらうのも良いでしょう。

●主催関係者間の振り返り

アンケート集計結果をもとに主催者側で評価会議を開催し、実施上の反省点、問題点、今後の改善点などを話し合うことは、このコンサートをより良いものにしていくために効果的です。

●報告書の作成

以上を経て、事業実施の報告書をまとめておくことは後に実施する場合の有益な資料となります。

4 現場の声

(1) 参加者の感想

[演奏家]

- ・普段、楽譜に書いてあることを条件反射的に演奏しているが、なにも見えないと逆に、作曲家の意図までを考えながら音を出すようになる。
- ・自分の音に深く耳を傾げるだけでなく、他の奏者の音をより注意深く聴かないとアンサンブルが作れないのでとても刺激になる。
- ・暗闇では、直立した姿勢を保って演奏するだけでも大変。いかに目から多くの情報を得て演奏しているかがわかった。

[聴衆]

- ・音楽を地球上にたった一人とり残されて聴いているような孤独感と演奏者同士がお互いの気配だけで演奏していることを想像すると妙な一体感が生まれたり、なかなか言葉では説明できない、不思議としか言いようのない感覚に包まれた。
- ・母が昨年からは視覚障がいになり、このコンサートを知りました。見える自分が見ない体験をし、さらに感動する音楽に包まれて涙が止まりませんでした。
- ・視覚障がいの方のためのパンフレット一つとってもさまざまなものを用意しているのが素晴らしいと思った。パンフレットの解説もわかりやすく良かった。
- ・ただ音楽を耳に流すのではなくて、暗闇の中で目を見張って音楽を探すようだった。演奏者の方がトークで「真っ暗闇が普通」と言っていたことが、印象に残っている。
- ・暗闇の中では、音が通常より際立って聞こえるように感じました。障がいのある音楽家をもっと活躍できるようになると良いと思いました。

(2) スタッフからのワンポイントアドバイス！

●視覚障がい当事者に頼りましょう。

広報関係の情報やノウハウから、リハーサルや本番での演奏家のサポートまで、当事者ならではの気づきやアドバイスから学び、共に制作しましょう。

●サービスを使いやすく。

点字や拡大文字のパンフレットを作成したが、あまり活用されなかったという声を聞くことがあります。ロビーの隅に積んでおくだけでなく、「点字パンフレットがあります」「拡大文字パンフレットはいかがですか」と声をかけたり、スタッフがパンフレットを持って開演前に客席内を周ったりするなど、積極的に働きかけると良いでしょう。

●ユニバーサルなサービスを。

開演前の音声ガイドや、開演時の舞台からの音の響き方の紹介などは視覚障がいのある人のみならず、すべての聴衆にとって有用な情報となります。視覚情報保障の実例を経験することで理解を深め、障がいの有無にかかわらず一緒に芸術を楽しむ貴重な機会となるでしょう。

●音声読み上げソフトには説明を。

音声読み上げソフトには種類が多く、まだ一般化していないので、使い方に関する事前説明が必要です。

●余裕のある時間設定、短くわかりやすい導線を。

視覚障がいのある人のためには、十分に余裕をもたせた時間設定が必要です。また、移動にはできる限り短く、わかりやすい導線を用意しましょう。段差や足元に危険のない導線を選ぶことも重要です。

●トイレ内の誘導人員を多めに配置。

視覚障がい当事者と同伴者（介助者）にはご夫婦の組み合わせも多くトイレ内の誘導人員が不足しがちです。特に男性の誘導人員を多めに確保しておくが良いでしょう。

●制作スタッフも誘導のトレーニングを。

リハーサルや本番の舞台で視覚障がいのある演奏家の移動介助を行う場合に備えて、制作スタッフは基本的な誘導方法を身につけておきましょう。

ただし、人によって歩く速度、介助者との位置関係、階段とエスカレーターのどちらを使うかなど、習慣や好みは様々ですので、実際に介助を行う場合は必ず当人の希望を確認しましょう。

5 過去の実施実績

●第1回 2015年12月5日

開催場所：東京藝術大学奏楽堂

演奏者：和波たかよし、東京藝術大学学生による弦楽アンサンブル

●第2回 2016年11月3日

開催場所：横浜市青葉区民文化センター フィリアホール

演奏者：徳永二男、川島成道、三浦章宏、弦楽アンサンブル

●第3回 2016年12月3日

開催場所：東京藝術大学奏楽堂

演奏者：和波たかよし、綱川泰典、東京藝術大学学生による弦楽アンサンブル

●第4回 2018年3月17日

開催場所：横浜みなとみらいホール

演奏者：川島成道、古川展生、三浦章宏、弦楽アンサンブル

●第5回 2019年11月2日

開催場所：横浜みなとみらいホール

演奏者：徳永二男、川島成道、三浦章宏、弦楽アンサンブル

●第6回 2021年12月5日

開催場所：横浜能楽堂

演奏者：藤原道山、澤村祐司、風雅竹韻、筑波大学附属視覚特別支援学校生徒

(2022年3月現在)